

2022年3月発行

CWS JAPAN NEWSLETTER NO. 66

いつもCWS Japanの活動に温かいご支援、
ご理解をいただき、ありがとうございます

日本語学校との新たな パートナーシップ： 防災ワークショップ

新型コロナウイルスが日本国内で感染拡大を見せ始めた頃、私たちはちょうど団体の活動の方向性・ビジョンを話し合っている時期でした。議論は何週間にもわたり、そのプロセスの中で、当初から取り組んでいた防災に多文化共生という価値観を掛け合わせるという新たな取り組みが産声を上げました。その後、全ての国内外の出張を中止した代わりに「今ここにいるわたしたちがやるべきこと」を考えたことによって、足元の地域ニーズに目を向けることができました。西早稲田に拠点を置きながらも全く地域のことも住民のことも分からず時を過ごしてきてしまった私たちにとって、それはゼロからの出発でした。

あれから2年の間、この取り組みのために4、50人（件）ほどの団体・個人に聞き取り調査を行ってきましたが、最も、苦労したのは地域、日本語学校との連携協力関係を築くことでした。地域関係者へのアプローチについては、新宿区社協から協力が得られ、また、今年度新宿区から本取り組みに対して助成いただいたことがブレークスルーになりました。その一方で、日本語学校との関係性づくりは非常にハードルが高く、何件電話してもアポさえも取り付けることができずにいました。

OUR SNS IS ACTIVE!

FACEBOOK
TWITTER

INSTAGRAMでも
情報発信しています！

最後のページを
ご覧ください



写真

ミッドリム日本語学校にて実施した
防災ワークショップの様子

「なぜ日本語学校か？」新宿区では外国人居住者の割合が最も大きいのは留学生人口です。なぜなら、新宿区ではその留学生が通学する日本語学校が集まっており、私たちの活動対象地域である大久保・高田馬場周辺は都内で最も日本語学校が密集するエリアです。これらの地域の外国人をターゲットにするのであれば、日本語学校との協力関係は必要不可欠であること、また、留学生は非常に流動性が高く、地域とのつながりも作りにくい上に、災害経験ゼロ、防災知識・日本語力ともに有事に対応するには不十分であることが分かりました。日本語学校との関係性づくりに苦戦していた矢先、昨年からの連携が始まっていたミャンマー人支援を行っているVEC

(Villa Education Center) と協働した防災ワークショップがきっかけとなり、新大久保に住所を置く日本語学校（友ランゲージアカデミー、ミッドリム日本語学校）繋がることができました。この2カ月に50名以上のアジアからの留学生や教職員を対象に出前防災ワークショップをオンラインと対面で開催することになりました。

私たちにとって悲願だった日本語学校との連携ですが、実際に開催してみて、あらためてニーズの高さを感じました。災害大国に暮らす日本人でさえも予測できない災害を自分事として考えることが、「まさか自分が被災すると思わなかった」というのが、多くの被災者から開口一番に出てくる言葉です。留学生の多くは震災、大規模災害未経験者が多く、日中は学校とアルバイト先を行き来し、自宅は夜寝に帰るだけという生活を送る彼らにとって近所づきあいや地域活動に参加できる余裕はありません。

"平時から地域と顔が見える関係性を作る重要性を参加者に知ってもらうことをねらいとしています。"

そこで、私たちが企画する防災ワークショップでは、自助よりはむしろ、日本の公助のしくみや共助に軸足を置き、災害発生後に被災者がどのような境遇に置かれることになるのかを考えてもらうことにしました。中でも、実際に新宿区が発災時のために準備している「避難所生活のルール（多言語版）」「避難所登録カード」を教材にしたグループディスカッションでは、自分達が直面するだろう様々なお困りごとに気づきをもたらすことができました。印象的だったのは、どちらの日本語学校でも、避難所登録カードが自分の所属町内会の記入を求められることに困惑したことです。



写真
「避難所生活のルール（多言語版）」を使ったグループワークの様子

災害は地域を襲い、避難所は地域の自治会によって運営されることになっており、外部からの支援も地域関係者との連携によって地域単位で行われます。被災して初めて自分達が居住する地元地域を意識させられ、地域を通さなければ必要な支援情報も物資も入手できない状況を知ってもらうことにより、平時から地域と顔が見える関係性を作る重要性を参加者に知ってもらうことをねらいとしています。すでに、地域との関係性を構築することに意欲的な日本語学校も現れており、その中間に、立つことができ、多文化共生型の地域防災体制づくりに一緒に取り組むことが私たちの次の目標です。

(文：ディレクター 牧 由希子)

仙台防災未来フォーラムでオンライン発表を行いました

3月5日（土）に今年で8回目となる仙台防災未来フォーラムが開催され、CWS Japanもセッション登壇しました。仙台防災未来フォーラムは、2015年の国連防災世界会議を契機に、仙台市がリーダーシップをとり毎年開催されている防災フォーラムで、「様々な防災の担い手たちが自分たちの取り組みを発表・共有・継承することで、国連防災世界会議での市民発信を一過性のものとすることなく、新たなネットワークや交流を生み出し、未来の防災に貢献すること」（仙台防災未来フォーラムHPより）を目指す取り組みです。CWS Japanもその趣旨に賛同し、発足当初から防災教訓を共有する貴重な場として位置づけています。

この度は、「日本やアジアの災害対応と防災教訓の共有 ～昨今の事例から～」と題し、CWS Japan、防災減災日本CSOネットワーク（JCC-DRR）、男女共同参画と災害・復興ネットワーク（JWNDRR）でタッグを組み、セッションを行いました。パキスタンやインドネシアの例から昨今増えている干ばつ・洪水などの気象災害の教訓、東日本大震災後のロビー活動の成果や重要性、仙台防災枠組とグローバルパートナーシップの関連性、ジェンダーと多様性に関する教訓など、実践者によるフラクナ共有が行えたと思っております。



写真

仙台防災未来フォーラムにおける
オンライン発表の様子

オミクロン株の感染拡大に伴い、残念ながら仙台での発表はかないませんでした。オンラインセッションとして仙台防災未来フォーラムのウェブページにも公開されています。是非ご覧頂けますと幸いです。

（文：事務局長 小美野剛）

パキスタン・害虫被害対策緊急支援のレポートを発行しました

パキスタンでは2020年の頭からサバクトビバッタが大量発生し、国内の農業地帯における甚大な農作物への被害が報告されました。深刻な被害を受けてパキスタン政府により全土に緊急事態が宣言されて以降、同国南部を中心にバッタ駆除のための措置がとられてきましたが、新たなバッタの群れが周辺国からパキスタンに及んでいること、そして今後バッタが繁殖期をむかえ、すでに産卵や孵化が始まっていることが同地域で確認されたことから、さらなる対策強化のニーズがでてきました。このような背景を踏まえ、CWS Japanはジャパン・プラットフォームによる資金協力により、パキスタン・シンド州におけるサバクトビバッタ（desert locust）被害対策緊急支援を2020年4月から2021年6月の間、2つの事業を通して実施してきました。

事業Phase 1の目的は害虫被害を食い止め、被災農家の生計および食料安全保障を回復、回復すること。事業Phase 2の目的は将来再発しうる害虫被害を軽減させる能力を向上することで、地域の災害対応力（レジリエンス）を高めることと設定して、次の活動を実施しました。

	Phase1	Phase2
(1)	卵駆除のための耕耘作業を住民に実施してもらい、その耕耘作業に対してキャッシュを配布（キャッシュフオーワーク）	幼虫捕獲のために農地の周りに側溝の設置を住民に実施してもらい、その作業に対してキャッシュを配布（キャッシュフオーワーク）
(2)	パキスタン政府に殺虫剤供与	—
(3)	総合的作物管理、総合的害虫管理研修の実施	Phase1と同様の研修の実施（但し、裨益者はPhase1と異なる）

そして、この度、これらの活動の手法や直面した課題を体系的にまとめ、また今後の同分野の支援に関する課題を抽出したレポート

「Locust Crisis Amid a Global Pandemic LEARNING FROM THE INFESTATIONS OF 2020 IN SINDH, PAKISTAN」（全文英語）を発行いたしました。同レポートは[Prevention Web](#)や当会の公式ウェブサイトでもご覧いただけます。

本レポートでは、上記2つの事業では取り組めなかった、バッタの大群を早期に発見し、被害を受けやすい地域住民にそのリスクを伝える「早期警戒メカニズム」の重要性についても触れています。砂漠でのバッタの大発生やそれに起因する被害は、そのほとんどが異常気象によって引き起こされることがわかっています。

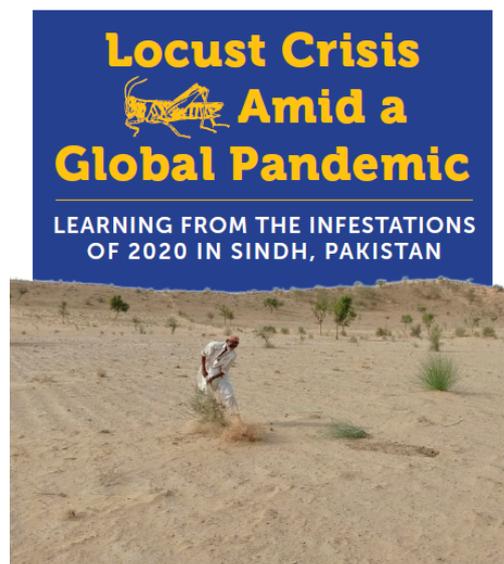
例えば、サイクロンなどの異常気象で大雨が降ると、バッタの繁殖に適した生態系が作られます。しかし、気候変動により天候が不安定になり、突発的なサイクロンや大雨が増え、バッタの繁殖に適した環境が新たに作られる可能性があります。

脆弱な地域の政府にとって、しっかりとした監視と予測方法を備えた早期警報システムを導入し、既存のリスクコミュニケーション・メカニズムを強化することは、時宜を得た投資と言えるかもしれません。

また、バッタの発生への対応は長期にわたるため、バッタの駆除以外にも多くのこと活動が必要となります。今回のケースが新型コロナウイルス感染症、豪雨被害等の被害に見舞われたように、長期間の対応は複合災害の可能性を含んでいることがポイントであり、その場合、管理が非常に煩雑になるリスクも孕んでいます。そのため、複合災害を想定した、より柔軟で全体的なアプローチが必要です。また、当会の対応で行ったバッタ対策は、インタビュー結果によると、新型コロナウイルス感染症拡大のために大きく悪化した飢餓や収入減の問題にも対処できたことが分かりました。本レポートでは、気候変動の影響など、様々な理由でリスクの状況が複雑化している現在、このような全体的なアプローチの実践は常にオプションとして検討することの重要性についても触れています。

全文英語となっておりますが、多くの人に読んで頂ければ幸いです。

（文：プログラム・オフィサー 西澤紫乃）



写真

レポート表紙

「大久保多文化共生X 防災バーチャルツアー」を公開しました

CWS Japanでは、2021年より「多文化共生型災害に強い地域づくり」という事業を実施しています。この事業は、災害時に支援にアクセスできず、取り残される可能性が高い「在日外国人」を対象として、地域にフォーカスした「多文化共生×防災」の実現を目指した取り組みです。令和3年度新宿区協働推進基金助成対象案件として採択され、新宿区協働推進基金からの助成をいただいています（詳細は[こちら](#)）。

この事業の一環として、新宿区大久保エリアを対象とした「大久保多文化共生×防災バーチャルツアー」が都内の日本人大学生・外国人留学生とともに企画・準備されました。このプロジェクトでは、学生メンバーを主体として、在日外国人向けに防災情報を提供するオリジナル動画が作成されました。こちらの動画は、2022年3月より[Youtube](#)上で一般公開されています。



写真

学生メンバーが考えた大久保多文化共生X防災バーチャルツアーのロゴ

今回は、本プロジェクトに企画・実行メンバーとして参加した学生の内4名にインタビューを実施し「プロジェクトを通して得られた学び」や「防災に向けて私達一人一人ができること」等について伺いました。（インタビュー：CWS Japanインターン 館農知里（早稲田大学2年））。



榎本郷佑さん

所属：早稲田大学 社会科学部2年
プロジェクトでの役割：事前リサーチ・アポ取り・インタビュー

「多文化共生」とは…「誰もが不自由なく暮らせる環境」

—プロジェクトで大変だったことはありますか？

大変だったことは、外国人を相手にアポ取りやインタビューする際の「日本の文化との違い」です。実際に、事前にアポ取りをして訪問したインタビュー先で、当日インタビュー相手がいないという問題が起きたことがありました。再度確認したら、「そんな話あった？」という話になって…結局、何週間後かにもう一度アポイントを取り直さなければいけないことになって苦戦しました。

—グループメンバーと交流する機会はありましたか？

はい。基本的には、グループメンバー2-3人と一緒に活動する形でした。日本に住む外国人の事情を理解している留学生メンバーが同じグループにいるおかげで、より多文化共生への理解が深まりました。

—プロジェクトで成長できたところはありませんか？

「物事をマクロな視点で見られるようになった」というのが、このプロジェクトを通じて成長できたところだと思います。プロジェクトを始める前は「大久保地区＝韓国人街」と考えていたのですが、この固定概念がガラッと変わりました。大久保地区には本当にさまざまな国籍・文化・宗教の方々が住んでいて、インタビューを通して、多様な人々が暮らしていく上での複雑さにどう対応していく

かという新たな問題意識を抱くようになりました。

— 「多文化共生」を一言で表すと…？

「誰もが不自由なく暮らせる環境」だと思います。多文化共生では、文化や言語が壁になって意思疎通ができないという状況からさまざまな問題が生じると思います。それを理解した上で、最終的に目指すべき目標が「誰もが不自由なく暮らせる環境」だと考えます。そして、外国人だけでなく、身体が不自由な人等も含めたそこに住んでいる一人一人にとってこれが大切なのだと思います。

— 「誰もが不自由なく暮らせる環境」の実現に向けて何が重要だと思いますか？

まずは「お互いのことを理解する」というのが一番重要だと思います。例えば、地域で交流する機会をより多く設置することがその第一歩となるのではないかと思います。

「でも日本人と外国人を別々で考えるのではなくて、「大久保」という地域の中で一つとして捉えることで、災害時にもみんなが協力し合える環境づくりができるのかなと思っています。」

— 私たち一人一人ができる防災は何だと思いますか？

最も身近でできる防災の一つとして、まずは行政が流している情報を定期的に確認しておくべきだと思います。普段からの日常生活で行政のウェブサイトを頻繁に確認している人は少ないと思います。でも本当に重要な情報がそこにたくさん載っていて…私たち一人一人にとって、そういう情報が災害時に役立つと思います。

— 「外国人と地域の繋がり」の大切さについて何か感じたことはありますか？

大久保地区でのインタビューで分かったのは、外国人は外国人コミュニティを作っているということです。でも日本人と外国人を別々で考えるのではなくて、「大久保」という地域の中で一つとして捉えることで、災害時にもみんなが協力し合える環境づくりができるのかなと思っています。



山内わかなさん

所属：日本女子大学 人間社会学部2年
プロジェクトでの役割：動画のストーリー
—設定・動画編集・インタビュー

「多文化共生」とは…「人との繋がり」

— プロジェクトで心がけていたことはありますか？

はい。動画編集では、視聴者として外国人も想定していたので「字幕のスピード」や「見やすさ」を心がけていました。日本人として、その視点が難しかったです。なので、動画編集を一緒に担当した留学生メンバーからの「目線」といものを大事にされていて、「このスピード速いかな？」などと聞いたりして協力してもらいました。

— プロジェクトで大変だったことはありましたか？

プロジェクトで大変だったことは「スケジュール管理」です。一週間に何回か立て続けて現地インタビューに行った時期があって、今年が人生で一番たくさん大久保地区に行った年だな～って思います。自分もインタビューしたいという気持ちがあって積極的に参加したのですが、インタビューと学校やバイトとの両立が結構難しかったです。

"若者という立場から、
小さなことでも
発信していくことが
大切"

—プロジェクトで楽しかったことはありましたか？

ほとんど楽しかったんですけど…大久保地区の色々な人と出会って、話せば話すほど大久保の知らなかったことを色々知ることができたのがすごく楽しかったです。

—プロジェクトを通して日常生活での意識・行動に変化はありましたか？

元々大学で「社会福祉学」を学んでいるというのもあって、人の生きづらさや障害を見つけることは日々あったのですが、このプロジェクトを通して、日本で暮らす外国人の生きづらさや多言語対応の大切さに対する新たな視点が得られたかなと思います。

—プロジェクトで得られた学びはありましたか？

チームで一つのいいものを創り上げる上で、個人の専門性をいかに上手く活用できるかをすごく学べたと思います。あと、自分は編集が好きだったり、想像力やアイデア出しが得意なのかもと気づけて実践できたというのがたくさん成長できたところの一つかなと思います。

—「多文化共生」を一言で表すと…？

「人との繋がり」かなと思います。多文化共生って「多様性を受け入れる」という感じのものかなとずっと思っていたのですが、それを越えて「誰とでも繋がっている」とことだと今は思います。大久保地区では多様性を受け入れることは既にできていると感じていて…それ以上にどうやって共に暮らしていくかに困っているのかなと感じました。そこで必要なのは「人との繋がり」だと思いました。

—私達一人一人ができる防災は何だと思いませんか？

一つ目は、自分の住んでいるエリアではなくても「日本で起こる災害に対する心配や問題意識をもつこと」だと思います。そのために私がよくやるのが、SNSでのリツイートやInstagramでのストーリー投稿です。社会情勢や環境問題と比べて、災害は「よく起こること」という認識で、日本ではあまり重要視されていないと感じます。若者という立場から、小さなことでも発信していくことが大切かなと思います。

二つ目は、あらかじめ「災害時に避難する場所を知っておくこと」や「食料の備蓄をしておくこと」です。災害時に、スーパーに駆け込んで「買えるのに買えない」ことになるのだったら、事前を買っておいて不自由なく避難する方がよいと思います。ただ生活困窮者の方だと「買えないし買えない」なんですよ…だから、事前に行ける人が準備をしておいて災害時に本当に困っている人に「分けられる」ような状況を作ってほしいと思います。



アリファ アッザーラさん

出身：インドネシア

所属：拓殖大学 国際学部3年

プロジェクトでの役割：動画編集・翻訳・広報

「多文化共生」とは…「一方だけではなくお互いが理解すること」

—プロジェクトで楽しかったことはありますか？

はい。メンバーにはベトナム人やネパール人の留学生もいて、一つの「文化交流の場」として色々な学びがあったのが楽しかったです。このように、メンバーの中でお互いに気

づきを与え合える関係がいいなと思いました。そして、このプロジェクトを通して日本人の友達が増え、日本人にインドネシアやイスラムの文化について知ってもらえたのも楽しかったです。「日本人はこのことを知らないのか！」とびっくりしたこともありました。

—プロジェクトで大変だったことはありますか？

やっぱり動画編集が大変でした。この動画はたくさんの人に見てもらうものだったので、締め切りまで何回も…たぶん30回くらいは作り直しました。

—プロジェクトで成長できたことはありますか？

「時間管理」が一番自分が成長できたところだと思っていて、「どっちがいま一番大切なのか」を意識できるようになりました。コミュニケーションの力も成長できたところの一つだと思います。最初はどうすればいいのかわからない時もあったんですけど、メンバーに聞くと、留学生メンバーにも分かりやすいように意識して説明してくれました。そのおかげで理解することができました。

—プロジェクト参加後の日常生活での意識・行動に変化はありましたか？

まずは「多文化共生」というもののイメージが広がりました。実際にいろんな文化を見て、異文化って素敵だなんて考えを持つようになりました。そして、「防災バーチャルツアー」を世界中に広げていきたいと考えようになりました。

実はインドネシアでも日本みたいに災害が沢山起こるんですけど、ちゃんと事前に準備するという意識を持つ人があまりいないんです…このプロジェクトをきっかけにして、自分がインドネシアに帰った時にこういうプロジェクトを作りたいと思いました。



写真
バーチャルツアー動画を
現場で撮影している時の様子

—「多文化共生」を一言で表すと…？

私はインドネシア人のムスリムとして日本に来ました。その中で、日本人にインドネシアやムスリムのことを理解してもらうだけでなく、私自身、日本人がインドネシアやムスリムに関する知識をあまり持っていないというのを理解しなければいけないと思いました。なので、多文化共生では「一方だけではなくお互いが理解する」ということが大切だと思っています。例えば、私は災害時に避難所でお祈りしたいというというのがあって…ムスリムに関する知識がない日本人にこちらから教えてあげるとか、ただ文句を言い合うだけではなくて、「お互いが勉強する」「お互いを気に掛ける」ことが一番大切だと思います。

—私達一人一人ができる防災は何だと思いますか？

やっぱり非常食を準備したり、避難所がどこにあるかを事前に確認したりしなければいけないと思います。そして留学生としては、どこの避難所が多言語対応しているのかも確認しなければならないと思います。いまは災害に関する知識はSNSでどこでも簡単に入手できるので、これらが一番簡単にできることだと思います。まず自分を守ることで他の人を助けることが出来ると思います。

"このプロジェクトを
きっかけにして、自分が
インドネシアに帰った時に
こういうプロジェクトを
作ってみたい"



チャン ティ マイ チーさん

出身：ベトナム

所属：早稲田大学

大学院社会学研究科2年（修士）

プロジェクトでの役割：動画編集・インタビュー・翻訳

「多文化共生」とは…「人がありのままに生きること」「寛容性がある社会」

—プロジェクトで大変だったことや楽しかったことはありましたか？

大変だったことは特にありませんでした…！逆に楽しかったことは、人との交流や現地調査です。今回のプロジェクトを通して、他の学生と交流したり大久保地区を街歩きしたりするのがとても楽しかったです。街歩きでは、大通りは「コリアンタウン」で韓国のお店が沢山あるんですが、裏通りに進んでいくとミャンマーやネパール、イスラムなど多くの国の人やお店が集まっていることが分かり楽しかったです。

—プロジェクトで学んだことはありますか？

プロジェクトで学んだことは、「現地に行くことの大切さ」です。Z世代の若者はスマホ一つで情報収集ができるけれど、膨大な情報から得られた知識は表面的にとどまってしまうと思います。実際、現地に行かないとその地域の地形も分かりません。現地に行って、実際に地元の人と話をすることで、彼らを「自分の友達」のように身近に感じる事が出来ると思います。

—プロジェクトを通して日常生活での意識・行動に変化はありましたか？

恥ずかしながら、これまであまり防災意識を持っていなかったんです。何かあれば、寮の管理人さんや他の学生に助けてもらえるという安心感が当たり前になっていました。そして、時々地震が起こるんですけど数分で終わるものと思っていて…防災バッグや避難場所を事前に把握していなかったんです。でも、これからの引っ越し先では、避難場所の確認やご近所さんとのコミュニケーションを徹底的に心がけていきたいと思っています。地域との強い・濃い繋がりは難しいと思うけれど、近所の人との軽いトークや挨拶程度の薄いつながりでも、何かあった時には助けを求めやすくなると思います。普段からいざという時のために色々考えなければいけないなと感じました。

「自分一人では生きられない」ので、普段から悩みがあれば一人で抱えずに誰かに相談することが大切

—「多文化共生」を一言で表すと…？

「多文化共生」には「存在を認める」や「連帯感を形成する」など様々なレベルがあるということを知ったことがあります。なので、国籍だけではなく、その人自身が「ありのままに生きる」ことができるということが重要かなと思います。別の言葉でいえば、「寛容性がある社会」ともいえると思います。



写真

専門家のガイドのもと、大久保まちあるきに参加している時

—私達一人一人ができる防災は何だと思えますか？

「自分の中に防災意識を持つこと」です。災害っていつ起こるか分からないので、いざというときすぐに避難できるように準備したり、誰に聞けばアドバイスをもらえるかを事前に確認することが大事だと思います。そして「自分一人では生きられない」ので、普段から悩みがあれば一人で抱えずに誰かに相談することが大切だと思います。

編集後記>

インタビュー・記事作成担当：館農知里（早稲田大学 政治経済学部2年）

この度「大久保多文化共生×防災バーチャルツアー」参加学生へのインタビューと記事の作成・編集を担当させていただきました。今回、学生メンバー4名の体験談を通して、「多文化共生」という大久保地区の新たな一面を垣間見るとともに、そこで暮らす外国人の生活・防災意識における現状や課題について沢山の興味深いエピソードを伺うことができました。またインタビュー全体を通して、学生メンバーそれぞれが自分なりの問題意識を持ちつつ「多文化共生×防災」の実現に向けて全力で取り組んでいるところに、私自身、とても刺激を受けました。同じように少しでも多くの方々にとって、このインタビュー記事が「多文化共生×防災」について考えるきっかけや刺激となれば嬉しいです。改めまして、インタビューにご協力いただいた皆さんありがとうございました！

過去のニュースレターは [こちら](#)

インタビュー記事は [こちら](#)

インターン紹介

今年の1月よりCWS Japanにてインターンとしてお世話になっている高柳研二と申します。昨年3月にそれまで28年間勤めていた会社を辞して現在は東京都町田市にある農村伝道神学校で学んでいます。

サラリーマン時代に出張で訪れたアジア諸国にて経済格差を目の当たりにすることもあり、少なからず人道支援には興味を持っていたものの、忙しさにかまけて何もアクションを起せずにいたのですが、今般偶々学校の先輩からの紹介でCWS Japanでお世話になることになり、思わぬ形で願いが叶う事となりました。

まだ短い期間ではありますが、関わらせて頂いて感じたのは一言で「人道支援」と言ってもその取り組みは非常に幅広く且つ地道で、その地道な活動を様々な人々がそれぞれの強みを生かしながら情熱をもって有機的に支え合いながら取り組んでいくことで様々な支援が成り立っているという事でした。私自身はそれなりに社会経験は積んできているつもりなのですが、それでも知らないことばかりで短期間ながらいろいろなことを学ばせて頂いています。

これからも様々なことを学ばせて頂きつつ、少しでも力になれるよう尽力して参りたいと思いますのでどうぞよろしくお願い致します。



写真

インターンの高柳さん

ご高覧頂き有難うございます。次回のニュースレターは4月末の発行を予定しています。

特定非営利活動法人CWSJapan
〒169-0051
東京都新宿区西早稲田2-3-18
日本キリスト教会館25号室

メールアドレス：
public@cwsjapan.jp
電話：
03-6457-6840



[CWSJapan](#)



[@Japan_CWS](#)



[cws_japan](#)